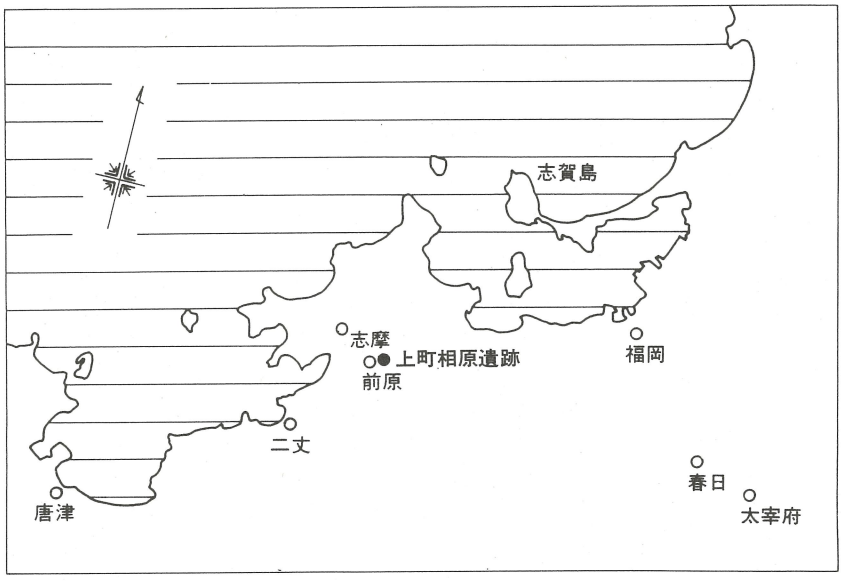
前原地区遺跡群

II

福岡県糸島郡前原町大字前原通称上町（かんまち）所在遺跡の調査

前原町文化財調査報告書

第 40 集



1 9 9 2

前 原 町 教 育 委 員 会

刊行にあたって

前原町は100万都市福岡のベッドタウンとして、近年目覚ましい人口増加をとげてまいりました。平成２年度には人口も５万人を突破し、全国でも屈指の人口規模を誇る町として、今後さらなる発展が期待されます。

人口の増加に呼応するかのように町内での開発事業も年々増加の傾向にあり、その内容も公共、民間事業の別を問わず多種・多様化しております。それに伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も確実に増加の一途をたどっており、調査面積、規模も飛躍的に拡大しているのが現状で、調査担当者の不足等様々な問題点に直面し、町をあげての新たな文化財保護対策の推進が課題となってきたことを痛感しています。

今回報告いたします上町遺跡は福岡法務局前原出張所庁舎の建設工事に先立ち実施した発掘調査の成果です。調査の期間は短期間ではありましたが、当地周辺の歴史を考える上での貴重な資料が発見され、有益な成果を得ることができました。

調査にあたって法務省福岡法務局ならびに建設省九州地方建設局の関係各位に多面にわたるご助力をいただきました。末尾ではありますが、記して感謝の意を表します。

平成４年３月16日

前原町教育委員会
教育長　樗木昭生

例　　言

1．　本書は福岡県糸島郡前原町大字前原38番地17に所在する遺跡の発掘調査報告書である。当遺跡名は所在地の旧字名をとって上町相原遺跡とする。

2．　発掘調査は福岡法務局前原出張所の建設工事に先立ち、建設省九州地方建設局の委託を受けて前原町教育委員会が実施したもので、最終調査面積は400㎡である。現地での調査期間は1991年９月17日～同年10月９日である。

3．　調査は前原町教育委員会文化課主事岡部裕俊が担当した。

4．　本書に使用した遺構実測図は岡部裕俊、岡田りつ子、中峰幸枝、柏田睦子が作成し、遺物図は岡部、末松伸子が作成した。また製図については末松伸子、内布久美子の協力を得て岡部が行った。

5．　本書に使用した写真の撮影は主として岡部が行なったが、上町向原遺跡出土の細形銅剣は岡紀久夫が撮影し、現場の空中写真撮影については㈲空中写真企画に委託した。また前原地区周辺の航空写真は㈱アジア建設コンサルタントが1983年８月10日に撮影したものを使用した。

6．　本書に用いた方位はすべて針北である。

7．　調査に関連する資料は一括して前原町教育委員会が保管している。

8．　上町向原遺跡出土資料の紹介に際しては糸島高等学校ならびに同校歴史部のご協力を得た。

9．　本書の執筆・編集は岡部による。

本　文　目　次

	頁
Ⅰ．はじめに	1
1．調査にいたる経過	1
2．調査組織	1
Ⅱ．調査の記録	5
1．位置と環境	5
2．調査の概要	8
3．遺構各説	10
Ⅲ．おわりに	12

図　版　目　次

図版1　上町遺跡周辺の航空写真(1／5,000 1983年8月10日撮影)

図版2　a．調査地点全景（東から）

　　b．同　左（上から）

図版3　a．1号土壙遺物出土状況

　　b．同　上（近景）

図版4　a．1号土壙土層断面（南から）

　　b．2号土壙（南東から）

図版5　a．1号溝（西から）

　　b．調査区南西壁土層（北から）

図版6　上町相原遺跡出土遺物

図版7　上町向原遺跡発掘調査状況（その1）

図版8　上町向原遺跡発掘調査状況（その2）

図版9　上町向原遺跡出土細形銅剣（糸島高等学校蔵）

挿　図　目　次

頁

第１図　現在の福岡法務局前原出張所（1992年２月）…… 1
第２図　調査地点における試掘調査風景（1991年９月）…… 1
第３図　上町向原遺跡の位置と周辺の主な遺跡（１／75,000）…… 4
第４図　調査地点と周辺の地形（1992年２月現在　１／5,000）…… 5
第５図　前原地区市街地俯瞰（1991年９月）…… 5
第６図　上町向原遺跡の現況（1985年当時）と主な遺構・遺物の発見地点（１／2,500）　6
第７図　上町古墳近景（1992年２月）…… 7
第８図　福岡法務局前原出張所工事計画と発掘調査範囲（１／400）…… 8
第９図　上町相原遺跡調査区内遺構配置図（１／200）…… 9
第10図　調査区南西部土層断面図（１／80）……10
第11図　１号土壙内小土壙実測図（１／30）……10
第12図　１号土壙出土土器実測図（１／４）……11

I. は　じ　め　に

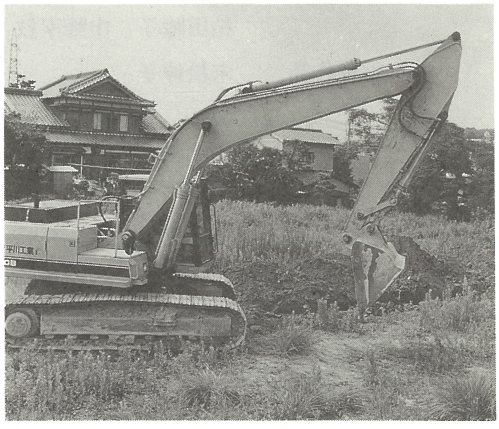
1. 調査にいたる経過

法務省福岡法務局前原出張所が前原町役場の北東隣接地に庁舎を構えたのは1970年のことである。当時、役場は現在地の北600ｍの北新地にあったが、現在地に移転したため、両者が隣合わせに舎を構えることになる。（第１図）

第１図 現在の福岡法務局前原出張所
（1992年２月）

建設当時は十分に広い敷地を確保しているかにみえた役場用地も、予想を上回る人口増加とともに増えた来庁者と自動車の普及に伴う駐車スペースの行き詰まりなどの理由から、用地が手狭になってきた。法務局も同様な悩みを抱え、さらに新たなＯＡ業務遂行のために事務所内のスペース確保に迫られたこと等の理由から、新たに庁舎の建設を検討することとなった。その結果、候補地として前原簡易裁判所の跡地である大字前原38番地の17（面積1585㎡）が浮かびあがってきたのである。

庁舎の建設に先立ち平成３年７月12日付で法務省福岡法務局から文化財保護法第57条の３第１項の規定による「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。８月20日付で福岡県教育委員会から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知が送致されてきた。これを受けて9月4日に現地で試掘調査を実施したところ、（第２図）当該地に埋蔵文化財が包蔵されていることを確認し、現計画では工事に先立つ発掘調査の実施が必要である旨を法務局側に伝えた。法務局側では工事の設計変更は難しいとの判断から9月13日付で調査の承諾をいただいた。事業の予算執行主体が建設省九州地方建設局であったため同月17日付で同局と発掘調査の委託契約を交わし、10月９日までの現場での調査を実施した。なお調査事業の完了は発掘調査報告書が発行される平成４年３月16日とする。



第２図 調査地点における試掘調査風景
（1991年９月）

2．調 査 の 組 織

本調査事業における関係組織の構成は以下のとおりである。

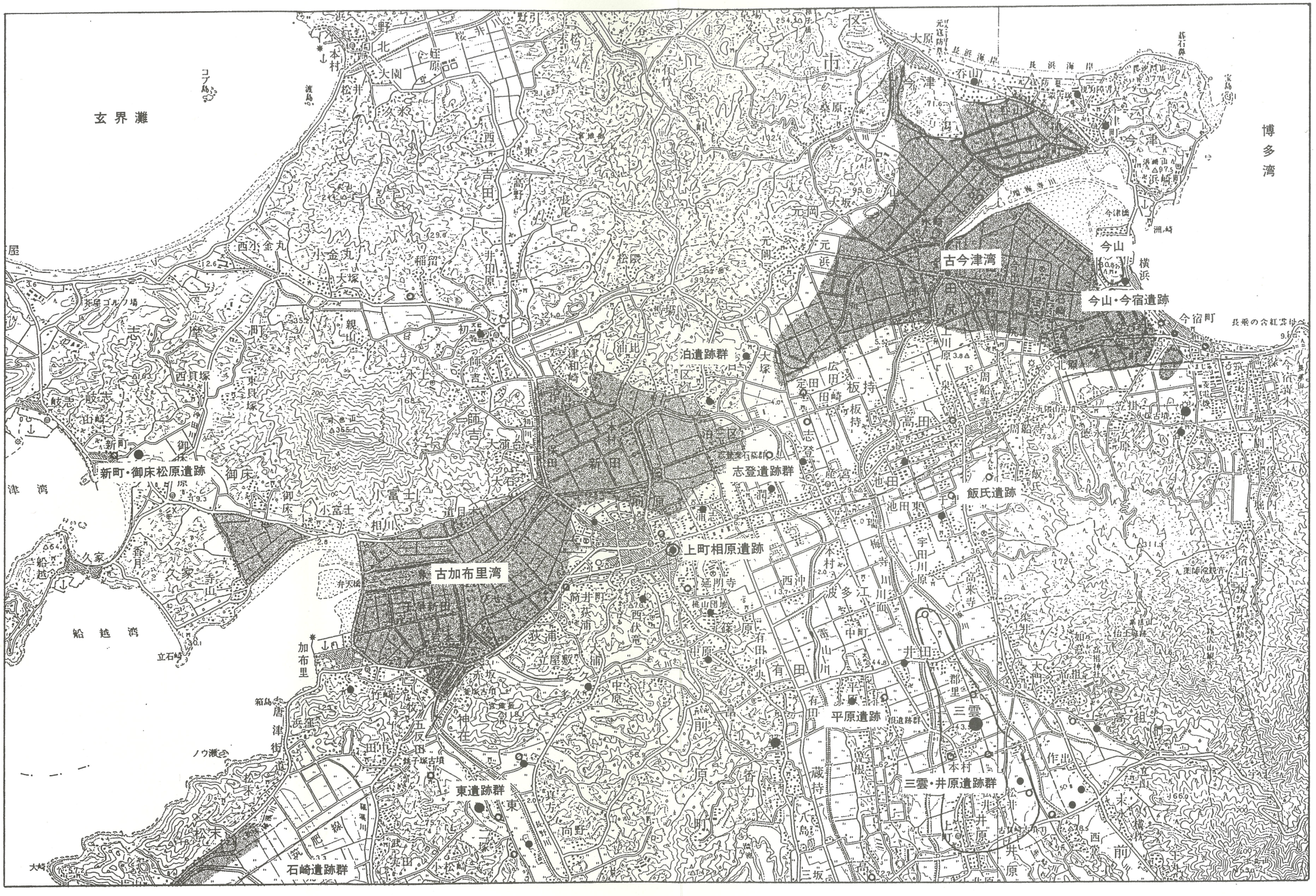
事業主体

法務省福岡法務局	局長	久末洋三
	会計課長	尼崎健三
	施設係長	松永楠男
建設省九州地方建設局	局長	藤川寛之

調査主体

前原町教育委員会

総括	教育長	樗木昭生
	文化課長	加幡怡都城
	文化財係長	吉村耕治
庶務	文化振興係長	中園俊二
調査	文化財係主事	川村博　林覚　岡部裕俊 瓜生秀文　角浩行
伊都歴史資料館事務	文化財係主事	矢野仁眞
調査担当	文化財係主事	岡部裕俊
発掘作業	小金丸利枝　本田タツ子　野村松江　菊池ナオ子　岡田りつ子 柏田睦子　中峰幸枝　和多治子　山崎チヨ子	
整理作業	末松伸子	

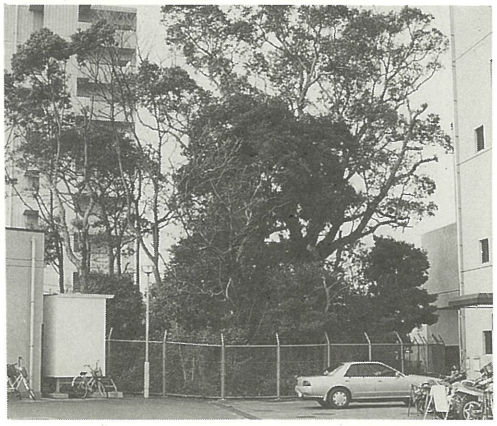


第３図　上町相原遺跡の位置と周辺の主な弥生時代遺跡（１/50,000　●集落遺跡　○墳墓遺跡）

調査の経緯については渡辺報告に、出土資料の一部については柳田康雄[註2]や拙者紹介[註3]があるので参照戴(いただ)きたい。また同地発見で現在は県立糸島高等学校が所蔵する細型銅剣を撮影する機会を得たので併せて掲載した（図版９）。主な遺物とその出土地点は第６図に示すとおりである。

なおこの向原遺跡および出土資料の認識について、最近若干の混乱が見られるので一言触れておきたい。この遺跡は大字「上町」、字「向原」に立地していた。しかし町名地番変更によって小字が姿を消してゆくとともに地籍上は大字「前原」地内に包括され旧地籍名は消滅することとなった。しかし遺跡名を命名するにあたり原田大六と渡辺正気は互いに旧地名の呼称を重視しながらも、前者は大字を用いて「上町」遺跡[註4]、後者は小字を用いて「向原」遺跡[註5]とした。よって以後二つの遺跡名が併用されることとなったわけであるが、両者の遺跡に対する認識の相違[註6]等から、最近は時として別の遺跡・資料として扱われる場合も見受ける[註7]。よって今後は同遺跡の呼称を「上町向原遺跡」として統一し、遺跡名称上での混乱を回避するとともに、その再周知化を図りたい。

上町向原遺跡の南約150ｍには1986年に前原警察署が新築されたが、その庁舎西南角地にフェンスに囲まれてひっそりと残された小円墳を見ることができる。これが上町(かんまち)古墳である。横穴式石室を主体部に持つが、既に盗掘を受けたらしく玄室の天井部に盗掘壙がある。正式な発掘調査は行なわれておらず、出土遺物等は知られていないが、大振りな割石を積み上げた石室であることから、６世紀代に築造された古墳であることは容易にわかる。市街地内で唯一残された古墳として貴重であり、今後とも現状の保存を切に望みたい。



第７図 上町古墳近景（1992年２月）

註１　渡辺　正気　「福岡県糸島郡旧糸島高等女学校校庭出土の甕棺」　『史淵』　81　1960

註２　柳田　康雄　「糸島地方の弥生時代遺物拾遺」『九州考古学』　58　1983

註３　岡部　裕俊　『前原地区遺跡群』Ⅰ　前原教育委員会　1988

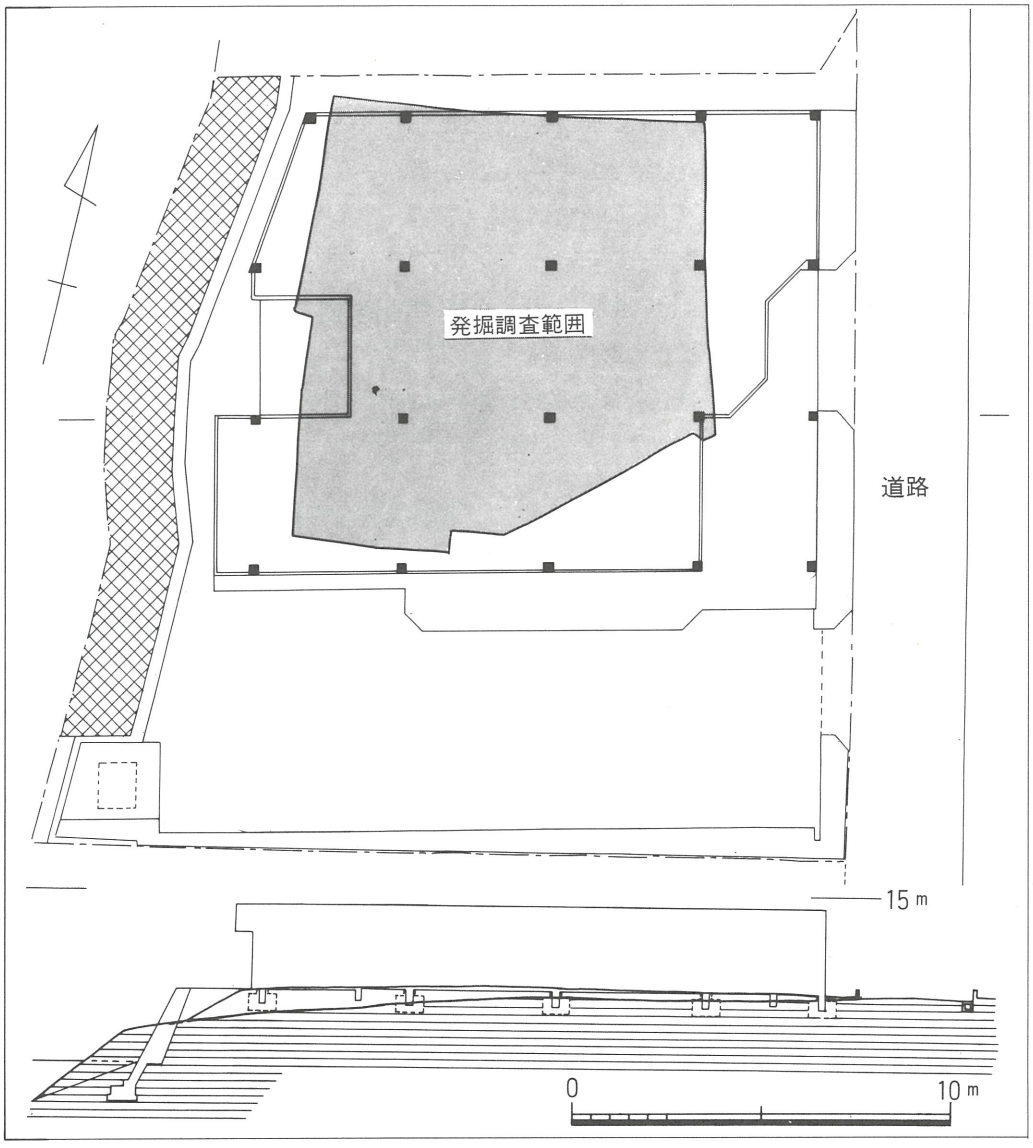
註４　原田　大六　『伊都国王墓展』図録　夕刊フクニチ新聞社　平原遺跡調査団　1969

註５　前掲註１文献

註６　原田は素環頭大刀が出土した大形石棺について、棺の蓋石が大きな花崗岩の一枚岩であったことから、支石墓と判断したようだ。しかし付近から弥生終末～古墳前期の甕棺が発見されたことや素環頭大刀の棺外副葬を考慮したとみえ、石棺の築造期を弥生後期に設定している。これに対し渡辺は石棺に本来盛土があり、またその周辺にも古墳様の塚があったことをつきとめ、暗に石棺が古墳の主体部であったことを示唆している。

2．調査の概要

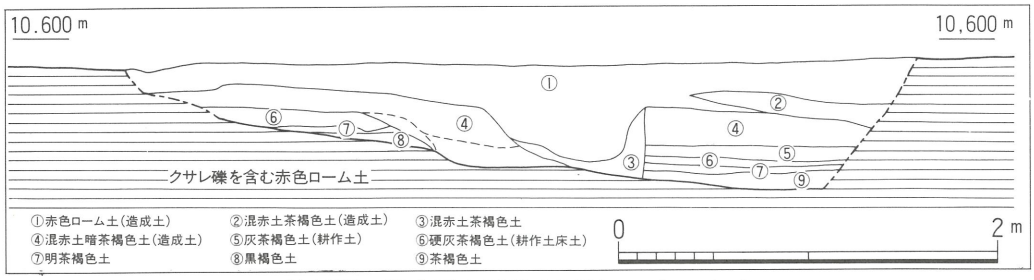
開発用地の南部は駐車場が予定され、遺構の保存が可能と判断されたため、北部の庁舎建設地点に限定して調査することとした。当初は建坪部分約700㎡全面を調査することを予定していたが、廃土置場の確保ならびに防災余地を確保するために南、西側を中心に全体的にやや面積を縮少して調査を実施せざるをえなくなった。（第８図）最終調査面積は400㎡である。



第８図　福岡法務局前原出張所工事計画と発掘調査範囲（１／400）

調査地点は、本来は東側に隣接し南北にのびた町道を分水嶺とする北にのびる低丘陵の西斜面にあたる。古くは畑として利用されていたらしく、畑溝の痕跡が小浅溝として斜面西部を南北に横切る。戦後しばらくは進駐軍の宿舎が丘陵一帯に軒を連ねて建てられ、調査地点上にもその一部が及んでいたと聞く。その後、当地には、省前原簡易裁判所が建設された。調査時まで残されていた旧簡易裁判所の門柱には当時の面影を残す表札が残っていた(図版扉)。また調査開始後のバックホーによる表土除去作業の際にはこれら建物の基礎や、井戸跡、造

第9図　上町相原遺跡調査区内遺跡配置図(1／200)



第10図　調査区南西部土層断面図(１／80)

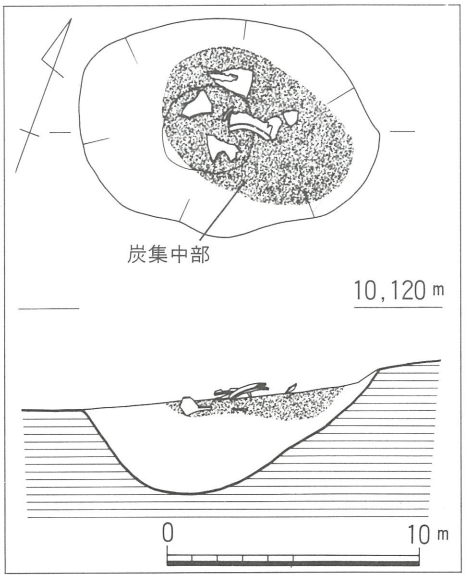
成に伴う客土工事の痕跡（図版５－ｂ）が随所にみられ、調査区南西部の土層の堆積状況の観察では近年の造成によるとみられる粗い赤土の客土堆積層を観察することができた（第10図①)。言い換えればこれら度重なる近現代の造成・建設工事によって遺跡は大きく現状変更を余儀なくされてしまったことになる。それを裏付けるように造成土のなかには土器・石器片を発見できたものの、旧状を維持していた遺構・遺物は少量であった。

３．遺構各説

検出した主な遺構は、弥生時代の土壙１基、時期不明の土壙２基、弥生時代の溝１条、平安時代の溝１条、近代の溝４条、柱穴等である。

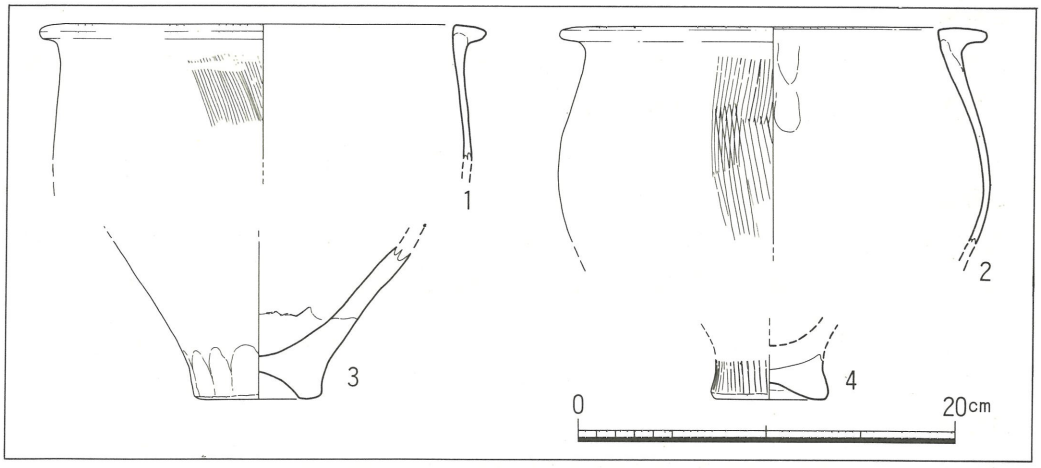
１号土壙（図版3､4-ａ　第11図）

調査区の北斜面で1号溝の南に接する土壙である。遺存状況は悪く平面プランは西側壁が削平のために消失しており定かでないが、南北にやや長めの楕円形であったと想像できる。主軸方位はＮ－10°－Ｗ、長さは220㎝、幅160㎝ぐらいであろう。底部の北寄りには不整形な３個の小穴がある。また南端にはさらに東西に長い楕円形の小土壙があり、その長さは119㎝、幅77㎝、深さは46㎝で最深部は中央よりやや西南に偏る。この小土壙の埋土中には多くの炭、焼土、灰が混入し、壁面は熱を受け硬化している。この上面で弥生土器と石器が散乱していた。



第11図　１号土壙内小土壙実測図(１／30)

出土土器（図版６、第12図）１～４はいずれも甕で１、２は胴上半部、３、４は底部片である。表面の剝落が著しく、遺存状態は芳しくない。１は復元口径23.6㎝、口縁断面は小さく逆Ｌ字型に屈曲し胴部は若干膨らみを有す。外面にはナナメハケ、内面にナデによる最終調整を行なう。胎土には大きめの花コウ岩粒を含んだ粗い粘土が使用されており、色調は橙褐色を



第12図　1号土壙出土土器実測図（1／4）

呈す。2は復元口径22.4cmで口縁断面は小さく逆L字型に屈曲し胴部は大きく膨らむ。胴部の最大径は22.8cmである。胴部外面はタテハケ、内面はナデ調整を行なう。胎土には大きめの花コウ岩粒を含み、色調は明茶褐色、焼成は良好である。3は底径6.8cm、胴部にむかって大きく開きながら立ち上がる。外面は板状工具によるナデ、内面はナデ調整である。胎土には大粒の長石、石英粒を含み、色調は桃褐色、焼成は良好である。4は底部のみの出土で、粘土接合部からきれいに剝落している。外面にはタテハケが見える。胎土は花コウ岩粒をふくむやや細かい粘土を用いており、色は赤褐色、焼成は良好である。いずれも城の越式土器の範疇に含まれるものである。

2号土壙（図版4-b）

1号溝の北で検出した小土壙で主軸方位N－62°－E、長さは98cm、幅64cmは深さ12cmである。埋土の大半は炭と焼土で、壁面は熱を受けて硬化している。出土遺物はないが、1号土壙内の小土壙に似た様相を示ことから、弥生時代の遺構と考えられる。

3号土壙

5号溝に西端を切られる長方形の土壙である。主軸方位N－83°－E、長さは145cm、幅80cm、深さは27cmである。出土遺物はない。

1号溝（図版5－a）

丘陵を東西に横断する2段掘の小溝で2号溝に注ぎ込む。埋土は灰褐色土である。埋土中から弥生土器、磁器とともに銅銭が出土した。

２号溝

丘陵の西斜面を北に向かって勾配がつく小溝である。１号溝とともに機能しており、土地の境界溝あるいは排水溝として掘削されたものと考えられる。

３号溝

調査区の北西隅から中央に８メートルほど伸びた溝で１号土壙の手前で立ち上がる。断面は蒲鉾型で埋土は黒色粘質土である。底面から土師器椀底部片が出土した。遺存状況は良くない。平安期の資料である。

４号溝

調査区の西端を南北に縦断する幅40cmほどの小溝である。畑の溝であろうか。

５号溝

調査区の南中央から北北西に傾斜する幅140cm程の溝で中途からやや西向きに流れを変える。埋土は暗茶褐色土である。弥生土器破片が出土した。

６号溝

２号溝、５号溝切る幅40cmほどの小溝である。４号溝と同様に畑の溝であろうか。

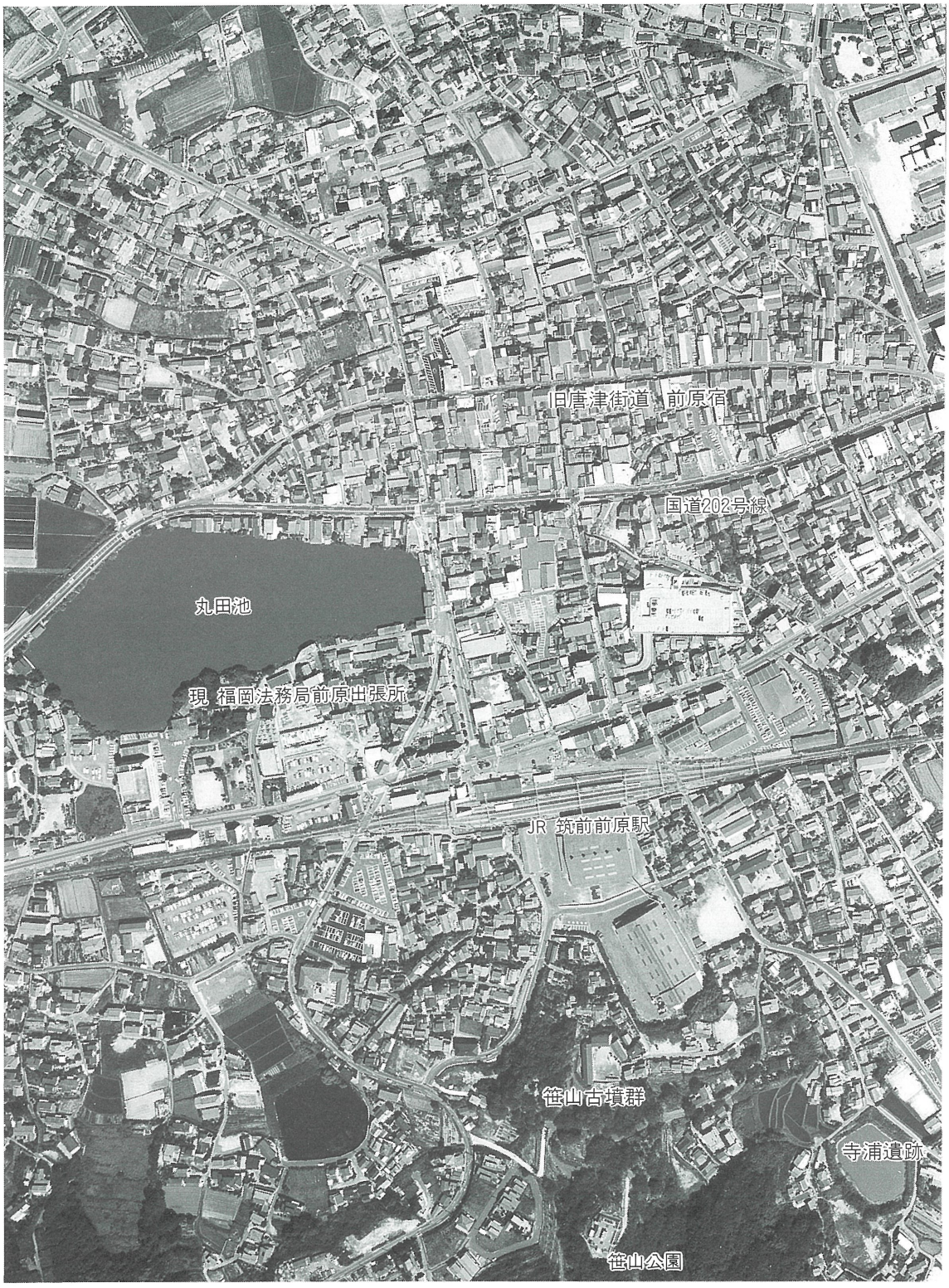
Ⅲ．おわりに

今回の調査によって当地を含めた一帯に弥生時代～平安時代の集落遺跡が分布することが判明したが、調査面積が限られたなか、遺構の遺存状態もすこぶる悪い状態であり、遺構、引いては遺跡としての性格を十分に把握するまでにはいたらなかった。

しかし、こと弥生時代の遺構に関して周辺に目を転じると、前項で述べた上町向原遺跡は今調査地点とは小谷を介して北西150ｍに位置する。現在のところ同遺跡からは住居等生活遺構の発見は報じられておらず、相原地区の集落と密接な関係を有する墓群であることも十分に考えられる。今後周辺地区での調査の進展によって相原、向原地区を包括した弥生時代の上町ムラの構造が明らかになることを期待したい。

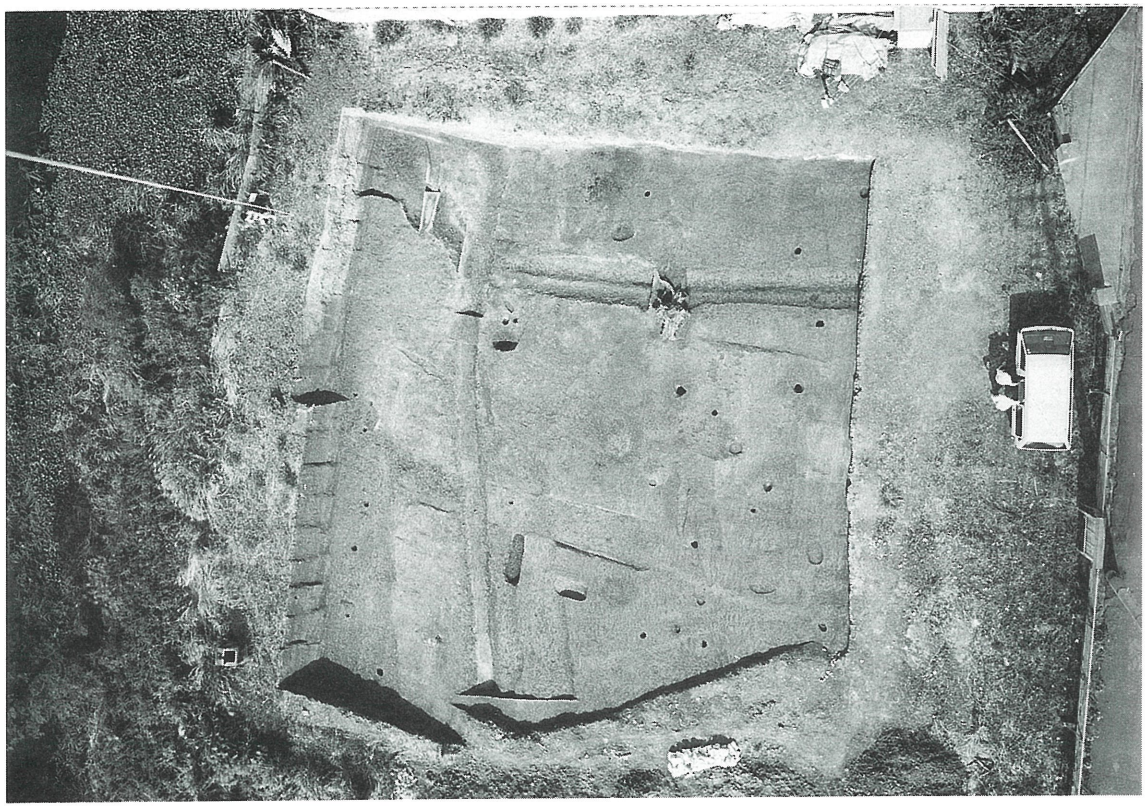
図　　版

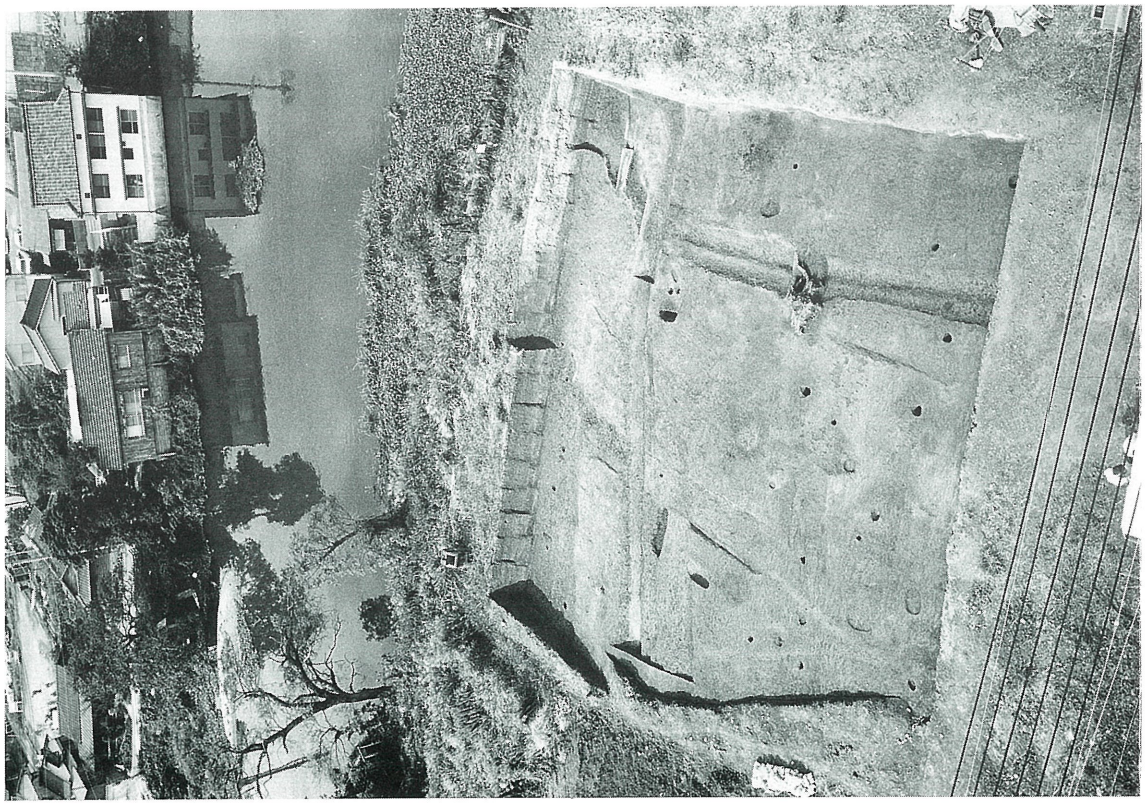
調査地点に残る旧前原簡易裁判所の標札


旧唐津街道　前原宿
国道202号線
丸田池
現 福岡法務局前原出張所
JR 筑前前原駅
笹山古墳群
寺浦遺跡
笹山公園

上町相原遺跡周辺の航空写真（1/5,000　1983年８月10日撮影）

図版2





a.1号土壙遺物出土状況

b.同　　上（近景）

図版4

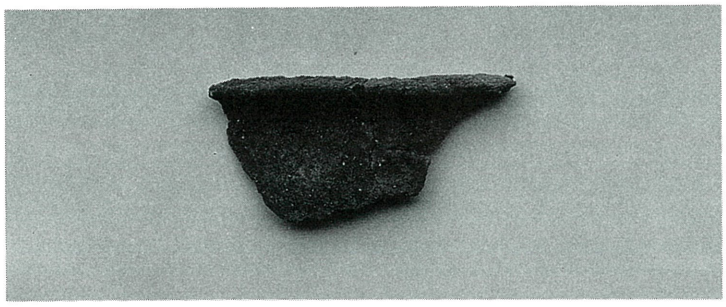
a.1号土壙土層断面(南から)

b.2号土壙(南東から)

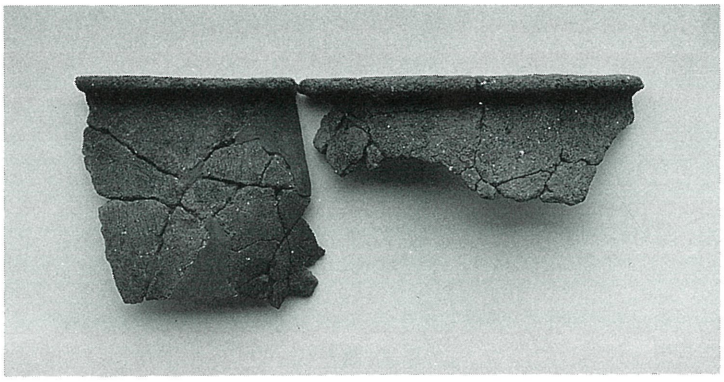
a.1号溝(西から)

b.調査区南西壁土層(北から)

図版 6



1



2

3

上町相原遺跡物出墳遺

① 発掘調査地点全景
（南西から）
調査区後方の石壇は旧糸島高等女学校の奉安殿基壇である。

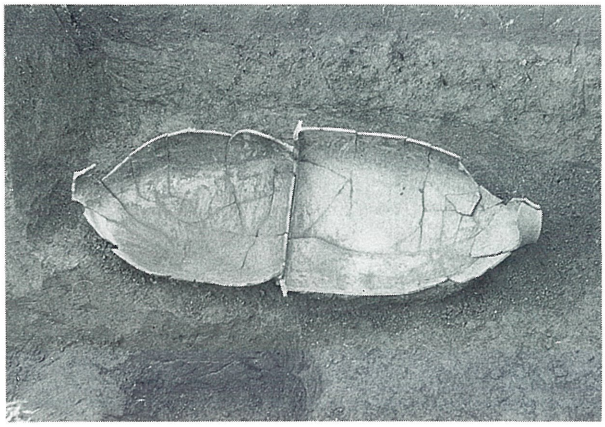
② 甕棺墓調査風景

③ 同　左

④ 甕棺墓検出状況
右 第1号甕棺墓（弥生中期）
左 第2号甕棺墓（古墳前期）

上町向原遺跡発掘調査状況（その1）

図版8

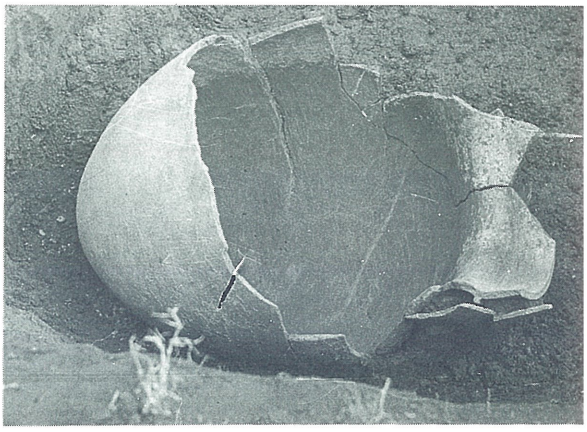


① 第2号甕棺墓完掘状況

② 第1号甕棺墓検出状況

③ 第1号甕棺墓検出状況近景

④ 第1号甕棺墓完掘状況



上町向原遺跡発掘調査状況（その2）

伝上町向原遺跡出土細形銅剣
（糸島高等学校蔵）

前原地区遺跡群
II
前原町文化財調査報告書 第40集

発　行　前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町大字前原623番地

印　刷　有限会社 松古堂印刷
福岡市西区周船寺1丁目7番64号